

「子どもの発達」と家庭教育

『家庭教育手帳』(文部科学省)には、子どもたちに「あなたの家庭にもっと望むことがあるか」と聞いたところ、どの年代の子どもでも一番多かった答えは「家族のみんなが楽しく過ごす」といった内容が記載されております。**家庭は、子どもたちの健やかな育ちの基盤であり、すべての教育の出発点です。**そのためにも、家族が意識的に協力し合うことが大切です。子どもにとって、家庭が心安らく居場所になっているかどうか、ときには見つめ直すことも必要です。

子どもが大人へと成長する過程は、心身の発達の状況によりいくつかの段階に分けられます。子どもの成長過程においては、個人差はあるものの、多くの子どもに共通して見られる発達段階ごとの特徴があります。子どもは発達段階ごとに、視野を広げ、自己探求を深め、志を高めていきますが、各発達段階における特徴を踏まえた成長をそれぞれの段階で達成することで、子どもの継続性ある望ましい発達が期待されます。それぞれの発達段階のポイントを知って子どもにかかわることも大切です。



子どもの発達段階 (ステージ)

※参考 E.H.エリクソンの発達理論

胎児期

乳児期

0歳～1歳・1歳半頃

幼児期

～6歳頃

児童期

～12歳頃

青年期

～22歳頃



【乳幼児期＝乳児期・幼児前期（0歳～2歳頃）】

☆発達上の特性☆

- ・自分を守り、自分に対し応答的に関わってくれる大人(親など)に対して、情緒的な絆(愛着)を形成する。
- ・大人の言うことがわかるようになり、自分の意志を大人に伝えたいという欲求が高まる。さらに、発声が明瞭になり、語彙も増加していき、自分の意志や欲求を言葉で表現できるようになる。
- ・食事、衣服の着脱など、身の回りのことを自分でしようとするようになる。

★この時期に大切なこと★

- ・親等への愛着、人に対する基本的信頼感の醸成
- ・欲求に基づく適度の自己主張と自己抑制の学習
- ・身辺自立の訓練、学習



【幼児後期（～6歳頃）】

☆発達上の特性☆

- ・他人が自分とは異なる見方や感じ方、考え方をすることを理解できない「自己中心性」はあるが、一方で他者の存在や視点にも次第に気付き始める。生活の繰り返しの中で、身体感覚を伴う直接的な体験や、具体的な事物に関連させながら、世界に対する認知を広げていく。
- ・食事や排泄、衣服の着脱など、自立できるようになるとともに、食事や睡眠等の生活リズムが定着する。
- ・遊びを中心とした友達とのかかわりあいを通じて、道徳性や社会性の原型(芽生え)を獲得する。

★この時期に大切なこと★

- ・遊びの発達や子ども同士の相互交渉の深まり
- ・基本的な生活習慣の定着と確立
- ・善悪の区別についての学習と良心の芽生え



【児童期（学童期）・小学校低学年（～小3頃）】

☆発達上の特性☆

- ・身体的・運動的な機能の発達に伴い、活動の範囲が広がる。言葉と認識の力も高まり、ある程度時間と空間を超えた見通しがもてるようになる。
- ・幼児期の自己中心性も残っているが、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してくる。学校等の生活経験を通じ、集団の一員との意識をもつようになり、子どもたち同士でも役割を分担して行動したりするようになる。善悪の判断は、大人の権威に依存してなされ、教師や保護者の影響を受けやすい。また、行為の動機よりも結果を基準とした道徳的価値判断を行う傾向が強いが、してよいこと・悪いことについての理解ができるようになる。

★この時期に大切なこと★

- ・「人として行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成
- ・自然や美しいものに感動する心などの育成(情操の涵養)

【児童期（学童期）・小学校高学年（～小6頃）】

☆発達上の特性☆

- ・物事のある程度抽象化して認識することが可能となり、その能力が増す。対象との間に距離をとって分析できるようになり、自分のことも客観的に捉えられるようになる。身体的にも知的・社会的にも成長し、有能感(肯定的な意識)または劣等感をもち。
- ・集団とのかかわりにおいては、徐々に集団の規則や遊びのきまりの意義を理解して、集団目標の達成に主体的に関わったり、共同作業を行ったり、自分たちできまりを作り守ろうとしたりすることもできるようになる。
- ・排他的な遊び仲間同士で活動するギャングエイジを迎え、学校(学級)においては、幾つかの閉鎖的な仲間集団ができる。集団間の争いや、所属する集団への付和雷同的な行動も見られるようになる。道徳的判断については、行為の結果とともに行為の動機をも十分に考慮できるようになる。理想主義的な傾向が強くなり、自分の価値判断に固執しがちになる。

★この時期に大切なこと★

- ・抽象的な思考への適応や他者の視点に対する理解 ・自己肯定感の育成
- ・体験活動の実施など実社会への興味・関心をもつきっかけづくり
- ・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養(対人関係能力, 社会的知識・技能の向上)
- ・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成



【青年（思春期）前期（～中3頃）】

☆発達上の特性☆

- ・内省的傾向が顕著になって自意識も一層強まる。自意識と実態との差に悩む時期でもある。程度の差はあるものの周囲の期待に添って「良い子」として振る舞ってきた者も、様々な葛藤や経験の中で、自分の生き方を模索するようになる。
- ・他者との関係では、親や教師の存在は相対的に小さくなり、特定の仲間集団の中に強い意味を見いだす。さらに親に対する反抗期を迎えたり、親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり、思春期特有の課題が現れる。また、仲間同士の評価を強く意識する反面、他者との交流に消極的な傾向も見られる。性意識が高まり、異性への興味関心が高まる時期でもある。
- ・具体的な事柄に関して首尾一貫した思考が可能であるだけでなく、目に見えない抽象的な事柄についてもかなり深い思索ができるようになり、多くの人々からなる社会の存在を認識し、個人と社会との関係等についても理解できるようになる。

★この時期に大切なこと★

- ・人間としての生き方を踏まえ、自己を見つめ、向上を図るなど自己の在り方に関する思考
- ・社会の一員として自立した生活を営む力の育成 ・特定の友人との深い人間関係の形成
- ・異性との望ましい関係の学習 ・法やきまりの意義の理解や公德心の自覚



【青年（思春期）中期（～高3頃）】

☆発達上の特性☆

- ・生活空間が飛躍的に広がり、それに伴って情報も生活体験も格段に拡充する。
- ・親の保護のもとから、社会へ参画し貢献する、自立した大人となるための最終的な移行時期である。思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、そこでどのように生きるのかという課題に対して、真剣に模索する時期である。反面、真剣に考えることを放棄して、目の前の楽しさだけを追い求める者もいる。
- ・知的にも情緒的にも人間や社会に対する認識が深化する可能性のある時期である。法やきまりに対してもそれ自体の正しさを問うたり、社会規範の相対性の面に関心が向かうなど、認識が進んでいく。

★この時期に大切なこと★

- ・自らの生き方について考え、自らの進路を選択・決定できる能力の獲得
- ・市民として必要な知識の習得・態度の形成(他者の善意や支えへの感謝の気持ちをもち、それにこたえる)

【引用・参考文献:『各発達段階における子どもの成育をめぐる課題等について(参考メモ)[改訂](文部科学省)】

【引用・参考文献:『子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題』(文部科学省)】